

那賀町地域再生塾

事業のポイント

- 那賀町で活動している「地域再生塾」に更に学習の機会を提供し、より効果的な市民活動となり積極的な展開を促すほか、那賀町と連携した地域活性化に取り組む。

事業の概要

1. 事業の目的

那賀町の地域再生塾は、町おこし団体「那賀人-Nacord-」と協働し、活動を支援することを通して、那賀町における地域再生人材育成と地域の活性化を図ることを目指している。

2. 事業の取組状況

● 森の読書会

「森の読書会」を10月16日に「相生森林文化公園あいいらんど」にて開催した。会場には複数のハンモックを木々の間に設置し、各人が本を持ち寄って、思い思いの時間を過ごした。またあわせて、地域資源を生かしたピラティス教室、鹿革の栞づくり体験をあわせて実施した。読書会は再生塾メンバーを中心に15名程度が参加した。鹿革の栞づくりは町外から来訪した児童らも参加した。



● サイクルツーリズム実験

「那賀町での自転車を利用した観光的魅力の再発見」に係る実験を11月21日に実施した。もみじ川温泉から八面神社までの往復路と、川口ダム湖周りの「スマート回廊」を、e-bike、タンデム自転車、ロングテール自転車の3種を用いて走行した。徳島大学生3名、地元の高校生1名、町内外の市民4名らがモニターとして参加した。学生らは、セルフテスト「TDMS二次元気分尺度」を用いて

事業代表者・連絡先

田中 俊夫（人と地域共創センター・センター長）
〒771-5406 徳島県那賀郡那賀町延野字王子原31-1
tel: 088-656-7651 fax: 088-656-9880
e-mail: cr-office@tokushima-u.ac.jp

自転車走行体験を通じた心理状態の変化もとらえることで、町内の新たなサイクリングルートの可能性について検証した。

実験終了後には、那賀町の特産農産物「木頭ゆず」を町のイメージキャラクター化した「ゆずばあちゃん」がタンデム自転車に乗車しての撮影会も行なわれた。



● 那賀町応援YouTubeチャンネル

「ゆずばあチャレンジ!」として、「ゆずばあちゃん」が地元のアクティビティや仕事文化などを体験し、町内の魅力を動画で発信している。今年度は川口ダム自然エネルギーミュージアムや八面神社、人形浄瑠璃について英語で紹介する動画もアップロードされている。



上勝学舎

事業のポイント

■ 四国で最も人口の少ない町上勝町において、持続可能な地域づくりのため徳島大学と上勝町との包括協定に基づき展開する事業。

事業の概要

1. 事業の目的

上勝学舎事業は、平成 21 年にスタートした。令和 3 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大のため例年のような一般参加者を広く巻き込んだ活動を行うことはできなかったが、感染症拡大に注意しながら地域資源の発掘、事業の可能性の探索を行った。具体的には、大学と地域連携のあり方を考えるワーケーションの実証実験、令和 2 年度より取り組む「E-Bike を活用したニューノーマル時代の体験型観光開発」のプロジェクト及び上勝晩茶製造に関わる乳酸菌に着目した「成層圏を活用した地域創生先端デザイン～上勝晩茶新商品開発の報告 & 試飲会～」セミナー、鎮守の森賦活プロジェクトを実施した。

2. 事業の取組状況

(1) ワーケーションによる地域課題解決プロジェクト

本企画は、徳島大学がサテライトオフィスを置く徳島県上勝町をフィールドとして、コロナ禍の働き方における新様式として注目が集まる「ワーケーション」を通じた地域課題解決の可能性を検証するものである。大学教員が一定期間上勝町に滞在し、普段と異なる環境の中で働きながら、自身の興味関心や専門性を活用して地域課題をひもとく鍵を発見し、地域課題解決に繋がるアイデアを生み出すことを目的として実施した。

参加教員は滞在中、自身の業務や授業をオンラインにて行う傍ら、地域住民、関係者へのインタビューを実施し、大学に求める役割や、地域連携の要望などについてのヒアリングを実施した。結果として、滞在中の教員と地域住民の関係性が深まり、次年度以降の PBL 型授業での連携など、大学と地域の新たな連携によるプロジェクトの種が生まれた。



町内事業者へのヒアリングの様子

滞在中はオンラインにて振り返り会を実施した

事業代表者・連絡先

田中 俊夫 (人と地域共創センター・センター長)
〒770-8502 徳島市南常三島町1-1
tel: 088-656-7651 fax: 088-656-9880
e-mail: cr-office@tokushima-u.ac.jp

(2) E-Bikeを活用したニューノーマル時代の

体験型観光開発支援事業

近年、観光スタイルが買い物主体の「モノ消費」から、体験型観光の「コト消費」へとシフトしており、そのひとつとして自転車を活用した観光地域づくり、サイクルツーリズムの振興が全国各地で取り組まれている。新型コロナウイルスの影響で観光施策の多くは中断しているが、自転車での観光は密になりにくく、さらなる注目が集まる。

本年度は e-bike の可能性を感じてもらうべく、11 月 12 日、13 日に、地域住民を対象としたモニターツアーを実施した。上勝町の役場職員、事業者、中学生などが参加し、両日ともに午前中の約 3 時間程度行った。ツアー後は、地域にどのような印象をもったか、今後の e-bike を使った事業アイデアなどについて、意見交換を実施した。



e-bikeのレクチャーを受ける参加者

モニターツアーの様子

(3) 「成層圏を活用した地域創生先端デザイン

～上勝晩茶新商品開発の報告 & 試飲会～」セミナーの開催

阿波晩茶の後発酵プロセスにおける乳酸菌に着目し、高高度気球を用いた科学実験の枠組みを利用した地域特産品「成層圏晩茶」の試飲会をセミナーとして行った。これまで、主に四国に偏在する後発酵茶の乳酸菌には地域偏在性や進化の特異性が認められており、そうした地域独自の進化系の原因は不明とされている。一方でアストロバイオロジー研究ではある特定のウイルスや微生物が成層圏で発見され、近年成層圏に到達するような菌が多様な変異に影響を与えるのではないかという仮説が注目された。そこで、阿波晩茶の嫌気発酵課程で生成される乳酸菌を採集しスターターとして活用するとともに、一部を成層圏に打ち上げ味覚成分に変化を生むのか実験をし、上勝晩茶農家の百野氏と協働し新商品開発に取り組んだ。実際には香気成分の生成には多様なファクターがあるため正確な測定は難しいが、それでも昨年度と今年度の 2 回に渡る試験生産と生

産者によるブラインド試飲の結果、成層圏に打ち上げた乳酸菌をスターターとして生産した晩茶には香気成分の変化を認めた。ただし、晩茶に特有の酸味や特徴的な風味は減少する傾向にあり、実際には嫌気性発酵の途中で関与する雑多な菌の相互作用が豊かな風味を醸成し、その複雑な発酵プロセスが晩茶にとって非常に重要であることが明らかになった。2021 年 11 月 16 日(火)に上勝町の polestar で行ったセミナーを経て、成層圏晩茶の香りと風味のバランスは、初めて晩茶を飲む人にとっては非常に飲みやすく取り付きやすいという評価もあり、新商品の販売を新年度に予定している。また飛翔した乳酸菌の DNA 解析も 2 月末に結果が出るため、次年度に報告を行うこととする。本研究の成果は JAXA の大気球実験にも展開し、次年度には JAXA の大気球にピギーバック実験として極限環境由来のウイルスを打ち上げ、成層圏環境から受ける影響により生じた DNA に対する変化を解析し、地球生命の宇宙空間における感生間移動の可能性を検証する。さらに、本成果は神山学舎での報道に加え、日本経済新聞や、J-WAVE による岡田准一の GROWINGREED などでも取りあげられ、一定の社会的インパクトを生み出している。

(4) 鎮守の森賦活プロジェクト

本プロジェクトは、集会の場、芸能・娯楽の場、信仰・伝説の場など、さまざまなかたちで人びとの暮らしに寄り添い保たれてきた鎮守の森(ちんじゅのもり)に一時身をおいて、さまざまなアクティビティを楽しみ、各人にとっての環境とのつながりを自然と感得していける場づくりをめざした活動である。

上勝町市宇集落の協力のもと、同集落の八坂・二ノ宮神社を舞台として、今年度はピザ窯の作成、自然にあふれる音をテーマとしたイベント「もりのおと」を開催した。



にしあわ学舎

事業のポイント

■ にしあわ学舎は平成27年3月、三好市井川町(三好市役所 井川支所)に設置。県西部2市2町(美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町)を対象に地域を支える人材の育成や課題解決等の事業を行う。

事業代表者・連絡先

田中 俊夫 (人と地域共創センター・センター長)
〒770-8502 徳島市南常三島町1-1
tel: 088-656-7651 fax: 088-656-9880
e-mail: cr-office@tokushima-u.ac.jp

事業の概要

● 魅力的なまちあるき体験開発

三好市井川町周辺において、都市デザイン研究室(本学理工学部)の学生3名を中心としたフィールドワークを複数回実施し、地域資源の把握を行なった。その結果、「テントサウナによるアウトドアイベントの開催」「サウナと連携したドラム缶風呂、飲食スペースの設置」など、食や歴史文化にまつわる地域資源を活かした当該地域の魅力発信、交流人口の増加をめざした一連の体験を今後、開発していくこととなった。



徳島大学・美波町地域づくりセンター

事業のポイント

■人口減少、津波防災などの課題を抱える美波町において、大学、地域行政、住民との連携を推進し、美波町における地域づくりをすすめることで、大学における地域貢献拠点としてのモデル発信を目指す。

事業の概要

1. 事業の目的

当センターは、2013年7月に、徳島大学と美波町との「持続可能なまちづくり」をテーマとした連携協定の活動拠点として、美波町役場由岐支所3階（2021年11月1日より美波町由岐生活支援ハウスに移転）に開設した。徳島大学と美波町が連携し、知的・人的資源の活用と交流を図り、相互に協力して地域の発展と人材の育成に寄与する。

2. 事業の取組状況

① 研究員が駐在し研究活動の実施

当センター事務室に研究員が駐在し、美波町由岐湾内地区における事前復興まちづくり活動の参与型分析を行っている。令和3年度は、第40回日本自然災害学会学術講演会・オープンフォーラム等で発表を行った。また、日本計画行政学『計画行政』の特集論説に寄稿した。

② 持続可能なまちづくりに関するシンポジウムの開催

持続可能なまちづくりの啓発や交流を兼ねたミニシンポジウムを開催している。令和3年度は、「生活安心調査報告会」（1月29日）を共催した。

③ 『美波共創塾』の運営

令和元年度より、美波町と徳島大学が協働で、“美波町の将来像を実現するために、多様な主体と新しい価値を「共」に「創」り上げていくオープンな場”として、『美波共創塾』の運営を行っている。令和3年度は、(1) 地域自治を担うリーダー育成において、地域住民を対象に『美波共創塾』の新規募集を行い、18名の塾生と地域づくり勉強会・情報共有会または塾生の現場視察・交流会を計10回開催した。また、塾生が3つの活動グループ『高齢者の生活支援』『ふるさと教育』『未利用の資源を活用した特産品の開発』に分かれて、年間通じてグループ毎の実践もを行い、年度末に活動成果報告チラシを作成、町内に全戸配布した。(2) 地域住民と協働する職員育成において、『美波共創塾通信』(No.3～7)を発行した。(3) 地域の宝である次世代育成において、日和佐小学校5年生を対象に、総合的な学習の時間を活用した年間カリキュラムを作成、計9回、延べ225名に授業を行った。また、由岐小学校全校生徒を対象に、計4回、延べ130名(内1回は6年生のみ)に授業を行った。(4) 町外の交流・関係人口の創出において、令和2年度に作成した『由岐湾内地区防災ツーリズムMAP』を活用して視察研修の受入を行った。

事業代表者・連絡先

田中 俊夫（人と地域共創センター・センター長）
〒779-2103 徳島県海部郡美波町西の地字大谷48-1
（美波町由岐生活支援ハウス）
tel / fax: 0884-70-1274
e-mail: tokushima-minami@tokushima-u.ac.jp

④ 美波町の自主防災活動の支援

美波町自主防災会連合会および由岐湾内3地区自主防災会連合会の事務局支援を行っている。令和3年度は、前者については、美波町避難所開設・運営訓練（11月28日）等の支援を行った。また後者については、夏休み西の地防災子ども教室（8月9日）、西の地防災きずな会防災サタ（12月24日）、TBSドラマ日曜劇場『日本沈没—希望のひと—』の美波町コラボ企画「ReHOPE POSTER」の制作等の支援を行った。

⑤ 美波町地域づくりの支援

令和2年度に発足した美波町由岐湾内地区の任意団体「美波のSORA」に参画し、高齢者の介護予防・生活支援・津波防災調査、生活支援サービスの実施、フレイル予防、SORAカフェの開催、令和3年度徳島県新規採用職員「地域交流体験研修」の受入等を行った。

⑥ 徳島県南の防災まちづくりの支援

牟岐町防災サークル青少年講座（10月17日）や令和3年度牟岐町避難所開設・運営訓練（12月12日）等の支援を行った。また、新たに海陽町立穴喰小学校5年生を対象に、総合的な学習の時間を活用した年間カリキュラムを作成、計22回、延べ180名（小学生4年生との合同授業1回も含む）に授業を行った。

⑦ その他

（講師、委員等）

徳島県内外での防災まちづくりに関する講演会等の講師を計15回務め、また徳島県復興指針推進委員会はじめ委員会に計10回出席した。



「美波共創塾」



「由岐小学校防災デイキャンプ」



TBSドラマ日曜劇場『日本沈没—希望のひと—』美波町コラボ企画

神山学舎

事業のポイント

■神山学舎は平成27年5月、神山町(神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス)に設置。若者に魅力ある地域づくり、持続する徳島づくりの未来設計プラットフォームを目指す。

事業の概要

1. 事業の目的

令和3年度は神山学舎事業として、成層圏に酵母菌を打ち上げ、さらに変性させたビール酵母を用いて「25241M」をKAMIYAMA BEER PROJECTより醸造販売し研究成果を社会実装した。また、水質浄化池をまちへひらくプロジェクトを実施し、地域の課題解決について考える場となった。

2. 事業の取組状況

●「成層圏ビール「25241M」の生産と研究成果の社会実装

徳島大学神山学舎では成層圏を活用した特徴的な地域商品の開発・地域ブランドの向上を目的とし、地域由来の素材の打ち上げ実験を行っている。令和2年には成層圏での紫外線等のストレスが酵母菌を変性させるという実証実験のもとでビールの試験生産を行い、味覚および香気成分に変化があったことを認めている。令和3年度はそれらの成果をベースに再度成層圏に酵母菌を打ち上げ、商品開発を行い社会実装にまで結びつけた。微生物の地域特性やプロバイオティクスの価値に注目が集まる中で、アストロバイオロジーと組み合わせ新たなイノベーションを起こし「飲む学術成果」として地域の特産物をデザインした。本成果はNHKによる所さん!大変ですよ「大気圏で!? 意外な場所の商品開発」を始め、NHK「有吉のお金発見 突撃カネオくん」、日本経済新聞、毎日新聞等で報道され、一定の社会的インパクトを生み出している。10月末に販売された「25241M」は2週間程度で完売した。



事業代表者・連絡先

田中 俊夫（人と地域共創センター・センター長）
〒770-8502 徳島市南常三島町1-1
tel: 088-656-7651 fax: 088-656-9880
e-mail: cr-office@tokushima-u.ac.jp

●水質浄化池をまちへひらくプロジェクト

神山町の町営住宅「大埜地の集合住宅」に設けられた水質浄化池を介して、かつて暮らしの根幹であった鮎喰川に再び人びとの意識が向くことをめざした活動を9月から開始した。今後の活動の展開に先がけて、池の中に自身を浮かべる「池プカ」体験の実験を数回重ねたのち、12月19日に地域交流シンポジウム「水質浄化池から川と暮らしのつながりを考える in 神山町 大埜地の集合住宅」を開催し、水質浄化池の設計者や、本学環境防災研究センターの山中亮一講師を話題提供者に迎え、楽しみながら池の浄化機能を維持していくための方策について議論した。また同日、シンポジウム参加者や神山町民を対象とした「池プカ」体験会も併せて開催した。

